

近藤芳美賞

(新作十五首)

世界はきれいな無

佐藤 薫

(神奈川 61歳)



受賞のご連絡をいただき驚いています。

この作品の内容・テーマからいって、認めていただけると、それとも避けられるかはっきり出るだろうと思いましたが、その意味からも受賞は考えておりませんでした。ただ、これが多数派か少数派かは判りませんが、ともかく声に出さなければ後々悔いることになりそうで、去年から追求していたテーマですので、歌にして良かったと今感じています。

これまで見捨てることなくご指導くださった師と諸先輩の方々に心から感謝申し上げます。

選にあたって

今回の応募作品の中には、戦中の体験をもとにした政治詠がいくつも見られました。「世界はきれいな無」は、その代表として近藤芳美賞とするにふさわしいと思います。世代的には、団塊の世代かと推定しましたが、最後の一首が示しているように、どこか覚めている世界観のもち主のようです。「クラインの壺」などという用例も、わたしたちの世代とのつながりを感じさせます。社会政治詠の先駆者、近藤さんの名の賞にふさわしい一連です。(岡井 隆)

この賞の由来する社会派の近藤芳美氏。その遺業を思い出しながら「世界はきれいな無」に注目した。一首目の被爆者の影が残された石段は広島で、広島は近藤氏の郷土。この歌を枕にして、確実に近藤氏が反対したであろう「自衛権」をめぐる一連が展開する。特に前半の歌が良かったが、議論を尽くさなかつた政治への不信と、沈黙するままであった無力感がうかがわれる。暗鬱な一年であったことを告発した一連として評価したい。(篠 弘)

近藤芳美氏はことあるごとに世界の情況に言及しつつ日本のあるやうを嘆いておられた。「世界はきれいな無」を読みながらそのことを思い出している。作品は原爆投下から出発した戦争否定の思いを熱く伝えようと、今日的な情況をふまえつつ歌っている。内容は一般性の高い今日当面の問題ゆえ、むしろ歌にくい苦しい一連だが、殉職か戦死か、政治はクラインの壺、プリアザブされた希望、などの表現とともに表題の怖れを浮上させる。(馬場あき子)

影だけがくつきりと在るその場所のまひるまにたつ八月六日

なにもみずなにもきかずにあの夏の記憶を忘れて議論は断たれたり

脱却といふ名の回帰 レジームを無視してぬばたまの闇が跋扈す

殺されることを待たずに殺せといふ法案はなたれ鳩を撃ち抜く

戦場もテロも遠くにあらざらむこの街と距離わづか半日

白昼の銃撃の夢 靖国にさくら青葉は影を濃くせり

殉職か戦死なのかはいはざりき自衛隊員死なばの問ひに

おもふこと洩らせず黙してゐる夏をたざりて乱れ咲く緋のサルビア

なにごとく疑ふことなく肯へる群衆弱者の踏み絵はつづく

そして秋。戻せないもの追ひかけて再起動するカタチノナイコエ

ゆふぐれのやうに世界がとほくなる政治はクラインの壺の論理で

ひだりともみぎともおもひきめかねつ皇帝ダリアは枯れて佇ちをり

顔のなきひとが革命歌をくちさむ風もひかりもゆれてただよふ

プリザーブされた希望をつつみこむ広場いつぱいの黒薔薇の花

やがて冬、シユプレヒコールのこゑかすれ世界はきれいな無となりゆかむ

岡井 隆 選

選者賞

プラトンの書

萩原慎一郎（東京）

抑圧されたままでいるなよ ぼくたちは三十一文字で鳥になるのだ

路上音楽家の叫び虚しく誰ひとり立ち止まることなく過ぎるのみ

挫折などしたくはないが挫折することはしばしば 東京をゆく

破滅するその前にさえ美はあるぞ 例えば太陽が沈むその前

ぼくにとつてのあなたのごとく黄金に光る太陽夕空にあり

自由な空よ 自由ではないこの街でぼくはあなたを探しているよ

更新を続ける、更新を ぼくはまだあきらめきれぬ夢があるのだ

朝が来た こんなぼくにもやってきた 太陽を眼に焼きつけながら

青春のいのちが果てる切なさよ 特攻隊の映像を観た

発言の撤回をする著名人 ソーシャルメディア全盛の世に

無意識のままに歩いて気がつけばいつものように会社の前に

気がつかぬうちに市と市の境界を自転車に乗り跨いでいるよ

家にいるだけではだめだ ぼくたちは芭蕉のように旅人になれ

帰宅してからの詩集読もうかと思いつつ漕ぐ自転車のペダル

プラトンは偉大で ぼくは平凡だ プラトンの書を読みつつ思う

選評

相当の数の応募があったことを喜びとします。老の境涯を歌った一連やら、配偶者を失った悲しみや、過去の記憶を歌った、いかにも短歌らしい連作も多くみられました。それらは作品の質としては高くなくても、この十五首連作に応募してこられた人たちの志を感じさせました。わたしたち選者は、受賞した作品以外のものもつ短歌連作の力を感じながら読んだのです。来年もまた、多くの方の応募を期待したいと思います。

選者賞に選んだ萩原慎一郎氏は、この賞だけでなく、今まであちこちで読んで来た常連の一人ですが「プラトンの書」という題名が語っているように、知的な作風であり、平均的でととのった技巧の持ち主です。この一連もたのしく読むことができます。

奨励賞の二人も、森岡政子さんの「ブツツリと切れたの？潮が満ち来たの？源は何？この変転の」などというのは、短詩のような短歌で、すこぶる技巧的であると共に人生を感じさせます。小川けいとさんの「擬態」もテーマそのものが知的です。それでいて人生を感じさせます。これからこの種の作品も増えるだろうことを期待しています。

（岡井 隆）

奨励賞

繋ぐ手を

森岡 政子（徳 島）

微積できる？英会話は？と探りあう貴女と初めて会いし日のこと

繋ぐ手を電子が流れていたんだね吹きつけ式のファウンダーション

世の中にヒールがついたスリッパがあることを知る貴女によって

首都圏に職場の記憶を持つことが肩のあたりのシフォンのように

女の子は嫌いと言いつその口でお祝いの会の計画たてる

母親を「彼女」と呼んで歯ブラシを動かす君は自立の女

「ブリジットジョーンズの日記」と「石田衣良」交換しては読む休業日

貸しくれし本のページを繰る時に君の好める香りがしたよ

異性とは引き連れるもの愛称で許されるもの君においては

内省と呼べる部品を想像もつかぬ形で内に持つ君

集団の中で感じる灰色の孤独を照らすトーチのように

休憩のサイダー泡立つ紙コップその気楽さで「炎色反応」

捕虜の地のリュックのベルトに縫いこんだ詩型用いて今、和を描く

どこまでも定年までも日常がずっとコトコト続くと考えた

ブツツリと切れたの？潮が満ち来たの？源は何？この変転の

奨励賞

擬態

小川けいと（天 阪）

雲のない空の高さは気味悪く早くどこかにたどり着きたい

口座から引き落とされる掛金が私の命の正しい値段

飼主を絶対神のように見るしあわせだろうあの黒い犬

すごいねと言われたのが透けていて焦らして最後に渡す「すごいね」

頑張ろうがんばろうっていつだって言ってる人の汚い机

ドアを出て振り向くことのない人が知ることのない私のお辞儀

怒らずに聞いてと先に言えるなら黙っているよと言えず聞いている

車窓から慣れた夜景にあの国の空爆動画をあてはめて見る

降りたつたホームが海岸だったなら私は海に還るのだろう

駅前でさしてうまくもない歌を押し付けられて引き摺ってゆく

唐突に結婚しないなら金を貯めると言った叔母を思い出す

ちようどいいところを過ぎて戻れない煮すぎて溶けた茄子だった物

月だっていつつも中途半端だし自分で光れはしないじゃないか

秒針は無邪気に跳ねる私にも下さい背中に入れる電池を

優しくて明るい人に擬態する樹上の蛾より精巧な翅

選者賞 ヒトになりしを 西澤 康子（東京）

船の揺れに身を委ぬるに慣れてきて三度目となる小笠原行き

おが丸は季節の境を飛び越えぬ十一月の今朝は夏空

孤島ゆゑ「蛇はゐない」とギョサンにて山ゆくガイドの足は褐色

満天の星の誕生したる日にヒト科のヒトはあらざりけむか

アセロラの真紅の実をば鳥よりも先に摘まむと宿の主人は

オガサワラオオコウモリの滑空の上を流星ヒトは小さく

褐色に焼けたる島の子どもらが走れば足裏の白さ目立ちぬ

グリーンペペの五ミリに満たぬ発光もヒトの鼓動もともにありたり

波音は大きく聞こゆと島民は言ひて明日の天気気づかふ

川面には月光そして夜行性動物の音立ちつくすヒト

打ち寄するサンゴの欠片を手を取れば意外に重く湿りてをりぬ

集まるとふ意味の昴を見上げたり サンゴの欠片ほどの地球よ

ハイビスカスのレイかけらるるを喜べる心持ちたりヒト科のヒトは

何隻もの見送り船からダイブする子らでんと大海原に

竹芝に着けば幻かと思ふ小笠原にてヒトになりしを

選評

選者賞「ヒトになりしを」は、生きた自然が残る小笠原を訪ね、その無垢な風土に自然体で暮らす人々に着材した、心もちの明るむ一連である。つとめて具体的に風物や住民を捉え、みずからに喚起するものを搜る。しかし素材が拡散し過ぎたことと、さらに事柄を内面化されたいことを希望する。

かつて近代の歌人が、ゴーガンの影響を受けて、南方の孤島へ憧れた歴史がある。これほど具象的でなかったが、渡らざるを得ない衝動が伝わってきたことを思い出す。

奨励賞「哀しみの色」は、福島第二原発のある富岡町を取材した、地道な一連。私の持論だが、くりかえし詠まれなければならない主題である。作者の観察力も表現力もレベルを保っているが、当地と作者との関連が定かでないために説得力が弱い。

奨励賞「つばめ来る里」は、「非戦」の詩を遺した石垣りん氏への賛辞から始まる。この一連も、被災救助に尽力した自衛官の海外派兵などを憂えたもので、本年の作品にふさわしい。しかし戦中・戦後に対する回想をモチーフにしたあたりが、やや淡くなる。

第四回に至り、応募作品が質量共にゆたかな現況を、起案者の一人として歎びたい。

奨励賞

哀しみの色

田村美和子（新潟）

バスでゆく福島県の富岡町かの原因の十キロ手前

みはるかす青田の海に風渡り豊けくあらむみちのくの地は

人住めぬ富岡町は田も畑も荒れて柳の梢伸びゆく

鬱蒼と草の茂れる酪農の里に牧牛一頭もなく

家々の屋根に土囊の載せられて雨漏り防ぐや梅雨空の下

階下へと雨の滴の伝ふらし朽ちたる畳に茸生えたり

ベランダに干されたるままのジーンズよ男の子は何処に幾つにならむ

庭先の無花果の実の熟れたるを啄む小鳥も虫もあらく

県道を隔てて片や帰られる片や帰れぬ家が向き合ふ

ここかしこ山と積まるる真つ黒き袋の中に潜むは何ぞ

汚染土を詰めたる袋の真つ黒き色の褪せつつ劣化兆せり

みちのくの鉄路は錆びるにまかせつつダイヤ途絶えて五年過ぎぬ

大漁を祝ひしならむ富岡の漁港流され残る断崖

哀しみの色にしあらむみちのくのマタタビの木の末葉真白き

猪の母子が無事に県道を渡りきるまでバスは見守る

奨励賞

つばめ来る里

佐藤 紘子（宮城）

戦争の記憶が遠ざかるとき戦争が近づくと詩う石垣りんは

戦時下の体験有るは八十代彼らも記憶も消ゆる世迫る

空襲に崩るる校舎の燃ゆる色焼き付きしままにと八十歳記す

戦にて死ぬも死なすもなく来れきこの国守れと声上げ歩く

この風はどっちに吹くか指立てるつばめ来る里虹立つ里に

赤信号見上げればついとつばめ飛ぶ今年もようこそみちのくの地に

救助せし手に攻撃の武器持ちて自衛官らの出勤まことか

津波下に搜索・救助の自衛官その映像にいくたびも涙

迷彩のパンツにブルゾンシオルダーもファッションになるあの震災後

エピソードギター奏する「鳥の歌」客席に沁みる平和かみしむ

空襲の夜から突如「みなしご」となりし人生朗読む「鎮魂の譜」

戦争孤児その境遇になったかも粟立つ思いわれ同い年

われの朗読む「戦災孤児」聴くともがらの戦後は父御の戦死に始まる

十五日終戦と言うも戦争に曲げられしツケ背に民生きる

あの六日九日そして十五日空は紺碧と今年の空も

馬場あき子 選

選者賞

銀河の果てに体育座りを

貝澤 駿一（神奈川県）

できるだけ大事なことをまちがえて歩いていこうどんな雨でも

迷ったら手をつなぐことサムネイルほどの思い出ふくらますように

夕焼けを追いかけてきたその場所で出会った夏の日をくりかえす

今ここにいてことでしか満たせない胸にひろがる原色の空

踏み切りで立ち止まるとき君といる世界の一時停止に僕は

教科書をひらいてみたら空だった国語の授業みんな笑った

デボン紀がしつとりと来る校庭で海を育てている僕たちに

水飲み場 背くらべした夜 そこに止まる時間を信じたかった

手のひらですくう 僕からこぼれでるものはこんなに温かいんだ

どの道を選んでいてもこの足で歩けばたったひとりの僕だ

正しい道 正しく見えてまちがっている道 たぶん僕の行く道

くもりなき鏡のなかにあるようなあすに付けたい名前をさがす

言えなかったさよならたちが創りだす銀河の果てに体育座りを

永遠を逃がさないこと さいごまでへたくそな字の日記をとじて

水たまりひとつ蹴とばすその先にあすという日があれば笑える

選評

若い人が口語文体で面白くうたえる時期がきているが、渋く文語でうたうのも心に沁みて悪くないという、いえば豊饒な言葉の坩堝の中にあるわけである。「銀河の果てに体育座りを」は口語である。「サムネイルほどの思い出」をふくらまして、結果は「言えなかったさよなら」が作り出す銀河の果てに、長い時間体育座りをして思いにふける自分像をみる。一連の言葉は高揚感が抑制され、知的な内面の片鱗を感じさせる用語をやや意図的な幼い文体で綴る。そこにある静かな燃焼と落着きなど、今の若い知性の一つかもしれない。

また「音楽は波であること」の一連は、「始まれば戻らないこと進むこと」という強いフレーズではじまる。だがこれは音楽の話。そして音楽は波であることは、「寄せてから遠のくまでの一瞬」という時間をみつけた。そこに、音楽という言葉を超えた詩があることをうたわねばいられなかったのだ。

そして「オフィス・ポリテイクス」は前述二作に比べるとリアルでありオフィスマンの日常の一齣一齣に心を落して考察し、思索するという方向の一連だ。「出奔の夢」にはじまるオフィスは破滅的に暗い。しかしこれが現実なのだろう。終り四首に少し救われる。

（馬場あき子）

奨励賞

オフィス・ポリテイクス

竹本 賢治（東京）

出奔の夢ほの甘き月曜の通勤列車は速度を緩めず

新聞をたてに折りつつ読みし朝 折りたたまれて未来はありき

名乗り出ぬ悪意のごとく冷やかにA3用紙が指を切り裂く

アルミ缶中途半端に凹ませてまた悔みをり自販機の前

「萎縮せず明るくいけよ」ボスの言ふもつとも暗き励ましの声

今生のひらめきを得たるアルベルトの明るき天窓を想ひみぬ

壮大な拡大解釈してをりぬデスクの君の優しかりし日は

へわたくしずるいんですのゝ酒も恋も嗜み生きし原セツ子楽し

先ほどの会議の席へ立ち戻り罵声あびせたき冬のゆふぐれ

上役を叱りとばして夢のなか解けなくなつた四の字固め

同僚の自殺の件をメールにて回覧したる奴を憎みぬ

アミーバに似たる我らは変幻に仮死を装ひ時に捕食す

行きつけのデリ・フランセの壁にかかる写真のキャパは半身に笑ふ

啄木の周りに在りし人々の心つぶさに評伝を読む

冬の陽はやさしきニブル ふふみつつ光りの海へ消えてしまはう

奨励賞

音楽は波であること

江連 夏帆（神奈川）

生まれば戻らないこと進むこと止められないことモルダウを吹く

一歳も九十歳も同じこと音が鳴ったら楽しめること

音楽は波であること寄せてから遠のくまでの一瞬を聴く

始まって進んでいって急停止音楽に乗って揺られていたい

通学路しれつとバツハ聴いている誰も知らないほうの私

テレビでもヘッドホンでも音楽は耳から心にきせかけてくる

音楽は高い天井広い部屋何人だって包んでくれる

穏やかな心でいたい美しく青きドナウの流れのように

迷わない後戻りしない強い音オーベルグランディオ蟬鳴いている

遠くでも近くでもないどこからトランペットの音沁みてくる

絶え間ない生活音も混ざりつつペン走らせるリズム合奏

散らばって四方八方音は行く君が指揮棒構えるまでは

帰り道みんなで開く合唱コン無邪気な笑顔に追い越されてく

窓開けて愛の挨拶雨音に混ざるメロディーフルートを吹く

十八歳何かが始まる直前の静けさが鍵バガニーニ吹く